［研究ノート］

幼稚園評価に基づく保育実践

Practice of Infant Education based on Evaluation of Kindergarten

楠本史郎[*1]、松本征子[*2]、津田之子[*3]
百成聡子[*4]、田中里沙[*5]、岩田奈々[*6]

要旨

学校評価から、「園庭の自然を生かした保育」について見直し、確認するという課題が見えてきた[1)]。この主題を意識し、教師全員が園庭の自然を見る視点を深め、確認し合いながら保育を進めていくことによって、子どもたちの戸外での遊びが、さらにさまざまな形に広がった。これらの園庭での遊びが、園舎内での遊びや、異年齢クラスとの交流、行事の内容へとつながり、発展していった。学校評価に対する教師の認識もまた変化した。

キーワード： 幼稚園評価(Evaluation of Kindergarten)／幼児教育(Infant Education)／自然(Nature)

はじめに（楠本）

北陸学院扇が丘幼稚園は、同・第一幼稚園とともに2008年度より毎年、幼稚園の自己評価ならびに学校関係者評価を実施してきた。その主な評価項目は次の通りである。

(1) 教育目標に関して
(2) 教育方針に関して
(3) 特色ある教育の展開に関して
(4) 校具備品等の整備に関して
(5) 満三歳児保育に関して
(6) 保護者との連携に関して
(7) 幼小連携事業の実施に関して
(8) 入園者の確保に関して
(9) 卒園後の指導に関して
(10) 教師資質の向上に関して

このように、キリスト教幼稚園として重要な項目をほぼ網羅して評価を行ってきた。

しかし学校評価の目的は、評価それ自体にあるのではない。評価によって、計画Plan → 実施Do → 評価Check → 改善Actというサイクルを回転させ、保育内容を毎年、園全体で組織的、継続的に改善・深化させていくことにある。その点で、本園の従来の評価の結果は、次年度の保育内容に反映されにくく、課題が見られた。

自己評価については、評価が園長を中心に行われており、現場教師の参加が少なかった。また北陸学院の２幼稚園を同時に対象としており、各園の実情を正確に反映しているとは言えない面があった。

学校関係者評価については、おもに北陸学院大学幼児児童教育学科教員および各園の保護者代表に依頼してきた。しかし保護者によっては、必ずしも本園の教育方針を十分に理解しているとはいえない。記入のない項目が多くある、指摘が誤解に基づいている、個人的な希望の記載に留まっているなど、評価が個人の主観に大きく依存する場合も見られた。これは、本園が教育方針、保育内容、さらには幼稚園評価について保護者に十分説

*1 KUSUMOTO, Shiro
北陸学院大学 人間総合学部 社会学科 キリスト教概論
*2 MATSUMOTO, Yukiko
北陸学院扇が丘幼稚園 副園長
*3 TSUDA, Yukiko
北陸学院扇が丘幼稚園 教諭
*4 DOUMIKI, Satoko
北陸学院扇が丘幼稚園 教諭
*5 TANAKA, Risa
北陸学院扇が丘幼稚園 教諭
*6 IWATA, Nana
北陸学院扇が丘幼稚園 教諭

明し、理解を求める努力を欠いていたことをも意味する。

評価は、毎年度、理事会・評議員会に報告される。また各園で掲示され、保護者・教職員に公表されている。しかしこれに対する反応はほとんど見られなかった。

結果として、計画、実施、評価を連続させてはいても、次年度の保育内容を改善し、評価を保育の質の向上に結び付けるという点では、改善のサイクルが十分機能してこなかった。評価の結果が保育内容の改善へと十分にフィードバックされているとは言えない。この反省に立ち、本園では、2013年度より、幼稚園評価の見直しと、それに基づく保育の改善に取り組んだ。これにより、保育者が保育の実態を認識し、毎年の保育の質を、より組織的、継続的に高め、子どもの生き生きとした遊びにつながることを目指した。

Ⅰ　主題の設定（楠本・松本）

2012年度の評価結果において、とくに注目したのは、「３．特色ある教育の展開」の項目であり、とりわけその中でも「環境を生かした保育」である。これに関する「成果・取組指標」、すなわち保育目標として挙げていたのは、「幼稚園の園舎や園庭、周囲の環境を活かし、幼児期にふさわしい保育を展開する。満三歳児クラスの定着に伴い部屋の確保とホール等の柔軟な使用を進める」ことであった。

それに対する自己評価は「園庭・三小牛キャンパスでなどで体を動かす。山菜や筍、栗や柿などを採り、味わい、四季折々の自然の変化を身近に感じて遊んだ。自然に興味関心を持ちその変化を観察した結果が制作・クッキング等にも広がる。保育室・ホールを全体で活用できるよう考えて使用した」となっている。評価は、Ａ：十分達成されている、Ｂ：達成されている、Ｃ：取り組まれているが、成果が十分でない、Ｄ：取り組みが不十分である、の４段階で行い、当該項目についての自己評価はＢとなっている。

一方、学校関係者評価については、評価者Ⅰ（大学幼児児童教育学科教員）は「キャンパスの自然環境を十分に利用した活動が工夫され、室内でも発達段階に即した活動が工夫されている」と考察し、Ａと評価している。評価者Ⅲ（本園保護者代表）は考察がなく、Ａと評価している[2)]。

しかし改めて教師が話し合い、この評価の内容および意味について問い直した。北陸学院扇が丘幼稚園は、5,000㎡近くもの敷地を有し、園庭は広大である。そこには様々な樹木が植えられ、木々に囲まれて、幼児が自由に遊ぶことのできる草地の広場がある。複数の大型遊具が置かれ、樹木にはツリーハウスやブランコも設置されている。幼児用プール２面の他に、砂場２面や築山、畑、池などがある。幼稚園の園庭として、恵まれた環境にある。しかしこの豊かな園庭を日常の保育に十分、生かすことができているかと、教師自身が問題を提起した。つまりＢという自己評価を厳しく受け止めたのである。その結果、2013年度より2014年度にかけて、「園庭の自然を生かした保育」を主題に、保育内容の改善に取り組むことになった。

Ⅱ　評価から改善への出発（松本）

「園庭の自然を生かした保育を目指す」という主題を、2014年度の保育の中心課題として定めた。これに取り組むきっかけとして、まず教師自身が園庭の自然を知り、そこでの子どもの遊びを広げるための視点を養う必要がある。そこで2013年の秋に、園庭の自然を知る「自然体験型環境教育指導研修」を計画し、実施した。これに基づき、年長児を対象としたネイチャースクールを開催、同スクール後に振り返りを行った。

１．見直しの実践①　園庭の自然を知る自然体験型環境教育指導研修（津田・百成・田中・岩田）

2013年10月19日（土）午前、小川将友氏[3)]を本園に招き、教師のための自然体験型環境教育指導研修を行った。

まず、幼稚園ホールで、研修のねらいや方法、基本的な考え、工程等について、小川氏から講義を受けた。それに基づき、教師が園庭において体験実習を行った。園庭の樹木に注目し、それぞれの葉や幹の色、形、におい、光沢、肌の状態を、それぞれ観察した。樹木の幹の質感などに着目し、そこにある自然の多様さ、豊かさを発見するさまざまな視点を習得した。最後に園舎に戻り、各自が、子どもを対象としたネイチャースクール

のプログラム案を作成した。それを発表し合って意見を交換し、年長組園児を対象としたプログラム案を練った。

この研修により、教師は、問題意識をもって自然を見ることで遊びが広がり、深まる可能性を感じ取ることができた。園庭の自然に対する教師の意識が深まれば、指導の質が高まり、子どもがさらに自然への興味関心を高め、遊びを展開することができる。園庭の環境を生かした保育の可能性が広がる。この認識のもとに、園児を対象としたネイチャースクールを開催する準備を進めた。

２．見直しの実践②　ネイチャースクールの開催（津田・百成・田中・岩田）

前項の指導研修に基づいて準備を行い、2013年11月２日（土）午前に園庭で、年長児46名を対象としたネイチャースクールを開催した。小川講師も参加した。

前項で立案したプログラムを、園児はグループごとに楽しんだ。樹木に注目して園庭の自然を発見するプログラムを行った。樹木の一本一本を子どもがよく見て観察し、幹や枝、葉に触り、それぞれの木の特徴を感じ取り、理解する。グループで話し合い、チャンピオン探しを行った。木を選び、「〇〇チャンピオン」と命名することで、その木の特徴を掴む。枝の広がり方を見て、「ピンピンヒラヒラチャンピオン」と名付けたり、木肌の模様から「かおチャンピオン」、葉の茂る様子から「もじゃもじゃくっつきチャンピオン」などと名付けたりした**（写真１）**。また、園庭に落ちた葉を集め、その形や大きさ、色などに応じて机に並べ、分類することも行った。

この経験により、木の葉にもさまざまな種類があり、自然が多様であることを、子どもたちが身をもって知ることができた。いつも見慣れた園庭ではあるが、樹木一つをとってみても、その幹、枝、葉の種類・大きさ・色・形はさまざまであり、季節によっても自然が変化することを感じ取ることができる。子どもたちが木や葉に興味を持ち、じっと観察したり、触れてみたりする姿が見られた。

ネイチャースクールの開催によって、木の葉に対する年長児と教師の興味が深まった。その結果、11月の保育では、木の葉に目を向けた遊びが展開された。年長組では、はっぱで作ったネックレスやさんや、はっぱの顔さがしなどの遊びが行われるようになった。また年長組に影響を受け、他の学年にも、木の葉を中心とした遊びが広がった。年中組は、木の葉を色別に分けたり、大小に並べ、画用紙に貼ったりして楽しんだ**（写真２）**。年少組もまた、木の葉を色別に並べたり、集めて砂場で焼き芋ごっこをしたり、砂を容器に入れ、その上に木の葉をちぎってちらし、ふりかけご飯ごっこをしたりするなどの姿が見られた。

木の葉に対する子どもたちの関心が広がり、これを中心として各クラスの遊びが展開されたので、この姿を保護者に伝えるため、「はっぱだより」を発行した。

３．見直しの実践③　教師による評価会（津田・百成・田中・岩田）

この日、11月２日（土）のネイチャースクールの後に、小川講師を含めた教師による評価会を行った。

（写真１）

（写真２）

当日のプログラムについて、評価表の項目ごとに各自が書き込み、話し合った。プログラムの良かった点、悪かった点、改善すべきポイント、プログラムの中でどのように行動したか、子どもの行動や発見、気づきはあったか、体調はどうであったか、前と後で教師の意識がどう変わったか、などを自己評価し、各自が発表した。その話し合いに基づき、改善策を考えた。その中で、ふだん身近な園庭であっても、問題意識をもって見て、触れるなら、自然の豊かさ、面白さに気づき、発見できることを再認識した。

しかし実際には、教師がプログラム通りに進めることに気を取られ、子どもが自然に触れて楽しむ点で十分ではなかったのではないか、という反省が行われた。そのことが、日常の保育のあり方を反省することにもつながった。

最後に行われた小川講師の助言もまた同様であった。まだ教師主導の部分が多く、むしろ子ども自身が自然に触れ、発見することが大切であると指摘された。また、子どもによって行動や興味が異なるのは当然であり、自然との触れ合い方は多様である、それを意識して、今回の経験を日常の保育に生かすことが重要であると語られた。

Ⅲ　評価から改善へ①　2014年４月～７月

（津田・百成・田中・岩田）

2013年秋に行った、園庭の自然を知る自然体験型環境教育指導研修およびネイチャースクールを受け、園庭の自然の豊かさに気づくことで、保育の視点、遊びを広げる意識が、教師の中に強まった。2014年度に入り、園庭の自然を意識した遊びの展開を心がけることになった。子どもが自然のなかで得るさまざまな気づきと発見に保育者が目を留め、そこから遊びを広げていくことを意識した。その例として、１学期の事例を取り上げる。

１．砂遊びの広がり

2014年４月、園庭にある砂場の一つに砂を入れ直した。そこから、もう一つの砂場へ砂を運ぶ遊びが広がった。

そこに見られたのは、砂を運ぶ方法を工夫し、また互いに協力して、より多くの砂を短い時間で運ぼうとする子どもの姿であった。初めは両手で砂をすくい、そのまま運んでいた。その後、砂場用のスコップやバケツを使うようになった。この様子を見て、教師は、子どもたちの目の届くところにさまざまな道具を置いた。その結果、子どもたちは、遊びに必要な道具を選んで使うようになった。除雪用スコップやソリも使った。また、一輪車を見つけ、これを使うことで、一度に大量の砂を運ぶようになった。子ども同士の協力関係が生まれ、一列に並び、バケツリレーで運ぶことも始めた。こうして年長児を中心に、幼稚園全体で砂運びを楽しむ様子が見られた**（写真３）**。

砂を運び終わり、砂場での遊びが始まった。５月、６月になると、４月にした経験からか、年長児は、プラスチック製の子ども用スコップよりも、金属製スコップを使う方が、大きく深い水路や山ができると気づき、使い始めた。形ができあがると、水道の蛇口からホースで水を引き、竹の滝から砂場に水を注ぎこみ、池も作った。この他に、ペットボトルやバケツでも水を運んだ。道具が本格的になるにつれ、ダイナミックに泥んこ遊びを、連日、楽しんでいた。暑さのなか、全身、砂まみれになり、夢中で遊び続けた**（写真４）**。

（写真３）

（写真４）

（写真５）

（写真６）

４月の砂運びの様子を教師が見て、子どもたちの目のとどく所にさまざまな道具を置くことによって、子どもたちは、遊びに必要な道具を自分で選び、使うようになった。子どものなかから生まれる遊びを尊重した結果、砂を運ぶ方法が大きく発展していった。同時に、自由な砂遊びの展開のなかで、個々の子どもの運動能力も見えてきた。

２．池掃除

2014年５月19日（月）の午前に、園庭にある池の掃除が始まった。職員が池の水を抜き、底に集まった魚やオタマジャクシなどを網ですくって、水を張ったたらいやバケツへ移していく。水を抜いてから、デッキブラシで側面と底にたまった土や石、藻などを取り除いた。

水を抜き始めてから、池の周りに子どもたちが集まってきた。水量が減るとともに、池の底に集まった魚とその種類の多さ、オタマジャクシの多さなどに驚いていた。職員の様子を真似て、自分たちも小さな網を手にし、作業を手伝おうとした**（写真５）**。職員のすくった魚やオタマジャクシを子どもたちがバケツに移していった**（写真６）**。とくに、池の水が減ると、池の中のくぼみに、水を求めて集まってきたカエルの多さに驚いた。

池の生き物に興味を持つようになり、後日、雨天でも池を見に行ったり、毎朝、池のカエルに挨拶して登園したりする子どもたちも見られた。とくに、この池掃除をきっかけとして、カエルへの興味が広がった。カエルがどこにいるのか、探し、的確に居場所を見つけ、手に取って観察するようになっていった。

教師は、子どもたちが池掃除の手伝いをしようとすることを禁止しなかった。子どもが立ち入ってもよい範囲を定めて安全を確保した。子どもと一緒に魚やオタマジャクシなどを、それぞれ別々の水槽に入れ、数を数えるなど、子どもの興味・関心を引き出し、広げていった。以後、子どもたちはカエルに対してとくに強い興味を抱くようになった。

池掃除に子どもたちが参加したのは、たまたまその様子を子どもが見て、興味を抱いた結果である。しかし作業に参加することで、池とそこに住む生物への関心は高まった。こうした子どもの姿を、「池だより」を発行して、保護者に伝えた。

３．稲作への挑戦

北陸学院扇が丘幼稚園では、毎年１月に、おもちつきを行っている。2014年度は、これを広げ、もち米作りから始めることにした。しかし水田を借りることができなかったため、園庭にミニポットを置き、これを用いて、年長児が稲作りに挑戦することとした。

2014年４月30日（水）、年長児が野々市市の林浩陽講師[4)]から、稲作りについて説明を受けた。各自のポットに田んぼの土を分けてもらった。すでに園庭で砂場での遊びに取りかかっていたので、子どもたちは水田の土と園庭砂場の砂との違いに気づいた。なぜこのような土が稲作りに必要なのか疑問に思い、質問した。林氏から、さまざまな生き物によって柔らかにされ、栄養に富んだ田圃の土でなければ稲が育たないことを教えてもらった。

５月26日（月）、林講師の指導で代掻きを行っ

（写真７）

（写真８）

た。ポットに水を入れると、中の稲作りに使う土がトロトロの状態になり、驚いていた。

５月30日（金)、林講師の指導で田植えを行う。各自のポットに３本ずつ苗を植え、園庭で育てることとした。３本の苗を植えたことについて、講師より「１本目は鳥さんの分、２本目は虫さんの分、３本目は自分の分」という説明を聞き、人間が他の生物と自然の恵みを分かち合って生きていることを知った。

６月11日（水)、年長児がバスに乗り、野々市市の林講師の水田を訪れ、見学した。田植えの終わった田んぼで泥遊びを楽しむ。水田の土の柔らかさ、粘りを体験するとともに、泥の中に、さまざまな生物がいることを発見した（写真７)。

６月26日（木）には、保護者も参加して、林講師による食育の講演を聞いた。食の安全と命について学ぶ。園庭で稲作りを行い、畑でも野菜を育てていることから、食べ物についての子どもの関心は高まった。

苗を植えた後、子どもたちは自分たちのポットの稲の育ちを毎日観察し、水をきらさないように世話を続けた（写真８)。

４．ツリーハウスのリフォーム

2014年６月14日（土）午前に、保護者の家庭が参加して、親子焼きそば会を行った。その後、桜の木の上に作ったツリーハウスのリフォームを行った。北陸学院大学幼児児童教育学科の金森俊郎教授が指導し、おもに男性保護者が、ツリーハウスの床や竹梯子の竹材の入れ替え作業を行った（写真９)。

多くの子どもたちが興味を持ち、桜の木の周囲に集まった。大人たちの作業を真剣に観察し、作業を真似たり、手伝ったりする。補修作業が終わると、子どもたちは待ちかねたように早速、木に登り、新しいツリーハウスで友だちと遊んでいた。自分の親が作業に参加したことで、それまで木登りやツリーハウスに関心のなかった子どもが、この後は、よく登るようになった。

教師は、自分で登ろうとする子どもの意欲を大

（写真９）

（写真10）

（写真11）

（写真12）

切にするよう心がけた。手を取ったり、体を押し上げたりせず、子どもが自分で登るように、励まし、見守った。その様子から、個々の子どもの運動能力も見えてきた（**写真10**）。

５．ザクロの花

2014年６月23日（月）以降、園庭のザクロの花が次々と咲き、園庭に大量に落ちる。

それを見つけた子どもたちが、ザクロの木の下にきて、拾ってきた（**写真11**）。子どもたちは、その形に興味を抱き、「タコさんウインナーがある」と言ったり、「なんでこんなところにウインナーがあるの？」、さらには「家にもウインナーがあるから植えたら、ザクロになるかもしれない」と話したりしていた。

拾ったザクロの花を使い、ウインナーやさんごっこをしたり、色水遊びの材料として用いたりした（**写真12**）。

教師は子どもの発見に共感し、その遊びの展開を見守った。その結果、子どものなかから遊びが広がっていった。同じザクロの花を素材としていても、年少児と年中児、年長児、それぞれの発達段階に応じた遊びの違いが見られた。

６．年中組デイ・キャンプ

夏休みに入った７月23日（水）午後１時、年中児26名が幼稚園に集まり、デイ・キャンプが行われた。

野々市市には、地域コミュニティバス「のっティ」の４路線が設けられており、路線ごとに車体のイメージカラーが決められている（**写真13**）。子どもたちは日頃、乗用車に乗ることが多く、公共の路線バスの経験が少ない。そこで、2014年度の年中組デイ・キャンプでは、園児が３グループに分かれ、それぞれに教師が付いて、野々市市の「のっティ」３路線に乗る計画を立てた。各地域にあるスーパーマーケットで、分担して夕食の食材の買い出しを行った（**写真14**）。園に戻り、合同で礼拝とプール遊びを行う。その後、各グループで夕食を作り、食べて、一緒に過ごす。夜に

（写真13）

（写真14）

なってから、降園となる。

バスに乗って町を見、また活動したことが子どもたちに強い印象を与えた。これが、２学期の遊びに影響を与えることになる。

Ⅳ　評価から改善へ②　2014年９月以降

（津田・百成・田中・岩田）

2014年度の１学期には、園庭の自然を意識した遊びを展開した。その結果、子どもたちは自然のさまざまな面に気づき、遊びを広げていった。この活動は夏休みを越えて２学期にも継続することになる。さらには、戸外・園庭と園舎内・保育室、それぞれの遊びがつながり、さらには日常保育と行事の活動も結び合うことになる。

１.「のっティ」の走る町

７月に行われたデイ・キャンプで、地域コミュニティバス「のっティ」に乗車した。年中児は、夏休みを挟んでも、その体験を忘れず、鮮明に覚えていた。そこで２学期に入り９月以降、「のっティ」の窓から見た町を保育室で作ることになった。

子どもたちで話し合い、バス停や幼稚園、車窓から見た小学校などを思い出しながら、町を制作した。素材を選び、形にし、色を塗るなどして、町を作り上げていった（**写真15**）。

また、町を走るバス「のっティ」を段ボールで制作し、園舎の中を走らせて遊んだ（**写真16**）。数人が乗ることができる。年中組の保育室を出て、園舎を一周する丸い廊下を「のっティ」が走り、年長・年少組を回った。これは、年少組の子どもを乗せて各保育室を回り、各室の遊びをつなげる路線となっていった。その結果、自然な形で縦割り保育に発展した。

園庭にも「のっティ」は出動し、次々と子どもが乗っては、庭を回った。

戸外と園庭、また保育室、園舎内のそれぞれの遊びが「のっティ」を媒介につながることになった。また異年齢同士の関わりも広がる結果となった。

２．オープンハウス

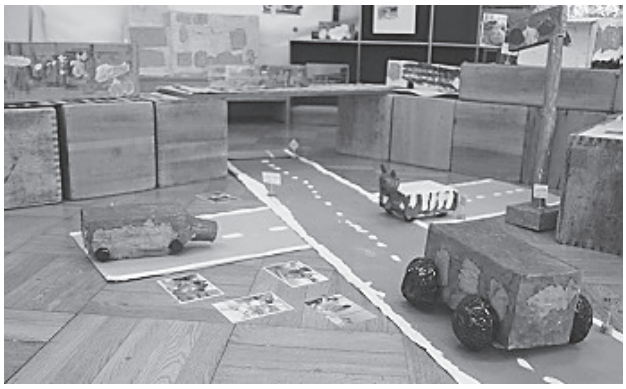
５月に行った池掃除の印象が、子どもたちのなかに強く残っていた。そこで、９月27日(土)に行われるオープンハウスの展示として、池の模型を制作し、保育室に展示することにした。

子どもたちは、水を抜いて現れた底のくぼみにカエルが多く集まっていたことを覚えており、強い印象を持ち続けていた。それぞれの記憶に残った池のイメージを合わせ、全園児が池の制作に加わることになった。

年長組は園庭に出て、池の形や、岩、橋、灯篭、草木などを観察した。観察結果に基づき、池を模型に再現しようと努める。大好きなカエルやおたまじゃくし、ドジョウや金魚なども制作し、模型の池に配置した（**写真17**）。

一方、年少児は、ボディーペインティングを楽しみながら、年長児が作った池の中を表現した（**写真18**）。その結果、池の模型は、全学年が参加する合同作品となった。

池の観察を始めてから、子どもたちが園庭で過ごす時間が長くなった。池だけではなく、園庭全体への関心が高まった。ツリーハウスへ登ったり、築山の吊り橋を渡ったりすることにも挑戦するようになった。また虫捕りや草花採取、すもう



（写真15）

（写真16）

や砂遊びなどにも取り組み、外遊びへ積極的に出るようになった。

３．プレイデー

５月の池掃除に始まった池への興味は、子どもたちの中に強く残り、継続していた。池に対する関心は、９月のオープンハウスに展示した池の制作を経て、さらに、10月18日（土）に行われたプレイデーの競技にもつながっていった。また年中児は「のっティ」バスへの関心を継続させ、２学期に入ってもその遊びを発展させていた。

こうした子どもたちの、池やバスについての関心を教師が汲み、話し合った結果、プレイデーにも、これらに因む競技を設定することとした。以下の競技が行われた。

(1) 年長　「今日は池の橋を渡っていい日」
　（写真19）
(2) 年中　「どの、のっティにのろうかな」
　（写真20）
(3) 年少　「お池の中から逃げちゃった」
　（写真21）

自分たちが興味を持つ池やバスが主題となった

（写真17）

（写真18）

（写真19）年長「今日は池の橋を渡っていい日」

（写真20）年中「どののっティにのろうかな」

（写真21）年少「お池の中から逃げちゃった」

ため、子どもたちは各競技を楽しみながら当日に臨むことができた。戸外や園庭での遊びや経験が、日常の園舎での遊びにつながり、さらには行事にも生かされることになった。

４．コメの収穫と脱穀

秋になり、５月に年長児が植えた稲に米が実った。10月６日（月）に、林講師の指導のもと、園児が刈り取った**（写真22）**。稲を束ね、稲架にかけて乾燥させる。自分が育てた稲についた実を数え、100粒以上、実っているのを見て驚き、喜んでいた。

10月20日（月）、乾燥の終わった米粒を、保育室で脱穀した**（写真23）**。一粒一粒、自分でもみ殻を外していく。「これ、いつ食べるの？」という質問に対して、教師が「１月におもちをついて、みんなで食べるよ」と答えると、「うわあ、楽しみ！」と反応していた。

４月の準備、５月の田植え、初夏から秋までの草取りなどを経て10月の刈り取り・乾燥・脱穀、さらに１月のもちつきへと、ほぼ１年にわたる稲の育ちを経験することになった。ふだん食べている米が、こんなに多くの作業と労苦、光と水と空気、泥によって作られていることを、子どもたちは感じ取ることができた。

翌2015年１月27日（火）におもちつきを行い、年長児が収穫したもち米を混ぜて使用した。園で収穫したもち米は、普段、食べているうるち米と異なり、粒が小さく、色も違い、また食感も違うことに気づいた。子どもたちは半年以上にわたる作業を思い出しながら、もちを味わった。

５．ザクロの収穫

６月、園庭に咲いたザクロの花が、秋に実となり、10月20日（月）、子どもたちと一緒に収穫した。次々に落とされる実を拾い、籠に入れながら、「わあ、中がこんなに真っ赤」、「宝石みたい」、「たくさんある」と、子どもたちは歓声を上げる。さらに、採りたての粒を食べて「甘酸っぱい」、「でもおいしい」と感動していた**（写真24）**。

早速、ザクロをじっくり見て絵を描いた。収穫を経験し、実際に実を味わったことで、ザクロに

（写真22）

（写真23）

（写真24）

（写真25）

対する思いが深まり、各自が丁寧に描き込んでいた（**写真25**）。６月に撮ったザクロの花の写真を見せると、「ここからこんなザクロができたんだ」と、花と実との関連を実感していた。

ザクロの収穫を経験したことで、子どもたちが園庭の自然の奥深さ、豊かさを感じていた。教師は、このような自然が身近にある環境の中で保育を行うことの豊かさを、改めて認識した。

Ⅴ　評価と課題（楠本・松本）

評価を意識することで、園庭を生かした保育を改めて考え直すことができた。そこから見えてきたものがさまざまあり、また課題も浮かび上がってきた。

１．園庭を活かした保育を考え直すことで見えてきたもの

(1) 自然に対する、子どもの生き生きした関心を引き出すことが重要である。

(2) 子どもが園庭の自然に触れ、その不思議に触れることで、遊びは自由に大きく広がっていく。そのためには、十分な時間を保障することが必要である。

(3) その場合、教師が自らの役割を自覚し、相互に連携することが求められる。教師は子どもの視点に立ち、子ども主導の自由な遊びを広げるよう心がける。そのために、教師間で、担当クラスを越えて連絡し合い、共通理解を形成する。

(4) 個々の子どもの運動能力を見極め、それに適した道具や環境を整え、提供する。

(5) 園庭や戸外での遊びが室内での遊びにつながる可能性を意識する。

(6) 興味をもった遊びにより、異年齢相互の交流が生まれる可能性を意識する。

(7) 外部講師や大学教員など、他者の目が、教師に気づきを与え、新たな保育の可能性を広げる。

(8) 自然に触れることで遊びを広げていく子どもの様子、発達の姿を保護者に伝え、家庭と幼稚園が協力して子どもの成長を支えていく。

２．課題

上記を踏まえると、園が負うべき課題も明らかになる。

(1) 園庭の自然の中で広がった子どもの遊びをどう深め、広げるか。

(2) 園庭での遊びと保育室での遊びを、どう関連づけるか。

(3) 子どもの様子を保護者にどう伝えるか。ホームページやクラスだより、降園時の連絡、参観や保護者会などの機会をどのように使うか。

(4) 教師間での連携をどう取り、一人ひとりの子どもを見るか。とくにベテランと新人教師、他学年の教師、専任教師と時間教師との連絡、連携が課題となる。

３．改善策

(1) 学校評価を教師で話し合い、共有する。教師が旧年度の評価を読み込み、新年度の保育目標設定につなげていく[5]。

(2) 保育、子どもの様子を他者に晒すことの重要性を認識し、公開に努めていく。

(3) そのためには毎年、中心的評価項目を絞り、さらにそれを変えていくなどの工夫を重ねていく。

(4) 新年度保育計画に学校評価の結果を反映させる意識を持つ。2014年度の評価に基づき、2015年度の保育目標を立てた。その中に、４．として「戸外活動の充実」を設け、「環境を生かした保育を行う」とし、以下の６項目を挙げた[6]。

①教員自身が園庭や三小牛キャンパスの自然の魅力を知る

②園庭の他、三小牛キャンパス等、自然環境を積極的に用いて保育に生かす

③子どもたちが自然に触れ、その驚き、魅力に触れるよう、工夫する

④子どもの驚き、興味関心を伸ばす

⑤屋外と屋内の保育の接続を図る

⑥幼稚園周辺の地域に目を向けることにより、気づき・発見を楽しみ、色々なかたちで表現する。

(5) 学校評価、保育計画立案を通して、教師間のコミュニケーションを図る。

(6) 学校関係者評価を通じて、保護者に、保育内容を説明する機会を増やす。保護者が園の方針を理解するよう促し、家庭と園が連携して保育

を実り豊かなものとしていくよう努力を重ねていく。

幼稚園評価を教師が自らの保育の問題と捉え、問い直すことから、園庭の自然を生かした保育という課題が見え、保育内容の改善する糸口が開かれた。同時に、この主題を巡り、教員同士が話し合い、園全体の保育について共通理解を持った。園舎内外の遊びがつながり、さらに異年齢の交流、日常保育と行事との結びつきにも発展した。また、園の自然を楽しみ遊ぶ子どもの姿を家庭に伝えることで、保護者とのコミュニケーションが広がった。今後も、幼稚園評価を生かし、保育の向上に結び付けていきたい。

1）2014年度石川県幼稚園教育研究協議会において、本園は「学校評価に基づく保育教育内容の深化と継続」という主題で研究発表を担当した。同年８月12日（火）に中間発表を行い、10月28日（火）には本園で公開保育を行った。そこでの研究発表をもとに、本稿をまとめた。

2）なお、この項の「改善策」は、「保育室・ホールの有効活用のため毎朝クラス間で打合せを行う。園庭や三小牛キャンパスなどを保育の場として積極的に用いる」としている。

3）小川　将友氏　環境教育事務所ネイチャーブランドプランニング代表

4）林　浩陽氏　林農産

5）2014年度の保育を振り返った上で、2015年度北陸学院扇が丘幼稚園自己評価シートは、次のようなものとした。

2015年度北陸学院幼稚園自己評価シート　幼稚園　組

	取組内容	成果・取組目標	達成状況	評価
1．礼拝	建学の精神に基づき、毎日の礼拝を中心としたキリスト教保育の基盤を形成する	①毎日、園礼拝を行う ②毎日、教職員祈り会を行う ③教師会で礼拝を行う ④園礼拝の充実を図る。奨励準備、奏楽、司会、奨励、祈り ⑤保護者会の礼拝を充実する ⑥教職員が教会主日礼拝への出席を心がける。出席予定教会＝ ⑦毎月の聖句を学び、理解する。		
2．教師会の充実	チームティーチングの要として教師会を充実し、保育の改善に生かす	①アジェンダを作成し、それに基づき運営する ②出席全教職員が主体的に参加・発言する。付箋等を用いて準備し参加する ③クラスや園児の様子を報告し合い、情報を共有する ④保育の課題を交換・共有し、保育を改善する ⑤記録を整備・共有し、保育の改善に生かす ⑥月案を基に保育内容を具体的に話し合う教師会をもつ		
3．保育の質の向上	・保育の実際を、記録により客観的に知り、課題の解決を図る ・遊びを通した保育を実践する ・一人ひとりを心にかける保育を行う ・クラスを形成し、共に育つ保育を行う	①園児の個人・グループのポートフォリオ（記録）をPC、写真やビデオ等で作成する。各保育室にカメラを常備する ②記録に基づき保育を振り返り、教師間で話し合う ③記録を、参観・個人懇談などで、保護者への説明等に生かす ④キ保連、ノーマルクラス、石川私幼等の研修に参加し学ぶ。教師会で報告する ⑤保育に関する論文をまとめ、「北陸学院大学研究紀要」に掲載する ⑥日常保育と行事との接続を図る ⑦日常保育の様子を写真やビデオにとり、教師間で共有することで子ども理解をふかめる。また、保護者にも伝える。		
4．戸外活動の充実	環境を生かした保育を行う	①教員自身が園庭や三小牛キャンパスの自然の魅力を知る ②園庭の他、三小牛キャンパス等、自然環境を積極的に用いて保育に生かす ③子どもたちが自然に触れ、その驚き、魅力に触れるよう、工夫する ④子どもの驚き、興味関心を伸ばす ⑤屋外と屋内の保育の接続を図る ⑥幼稚園周辺の地域に目を向けることにより、気づき・発見を楽しみ、色々なかたちで表現する。		

5．園舎建築の実現	建築期間の安全確保と保育の工夫を目指す。	①設計者・施工業者との連絡を緊密に行う ②物品の整理と移動計画の作成、円滑な実行 ③建築期間の園児の安全を確保する ④起工式、旧園舎お別れ会、完成式を行う ⑤建築期間の園庭の使用を工夫する ⑥建築期間に園外での保育を意識的に行う ⑦園舎建築に関わる保育計画の立案と実践 ⑧新園舎での保育を構想する ⑨建築期間の駐車場を確保する		

6）現実には、2015年度に園舎改築工事が実施されたため、園庭は制限されることになった。しかし砂場や池、多くの木々は残され、園庭の自然は一定程度、保たれた。また、園外保育の機会が増え、近隣の公園等に出かけることが多くなった。一方では、大学・三小牛キャンパスも耐震工事に入り、同キャンパスの自然に触れる機会は減少せざるをえなかった。